

昭和 27 年の岡山県苫田郡富村—その三 お祭りの日

民俗建築学アーカイブ担当

Tomi Village, Tomata-gun, Okayama Prefecture in 1952 Part3 On a Festival day

前会長佐藤重夫先生は、戦後、復興院の委嘱を受けて、岡山市の都市計画に奔走しながら、他方では岡山県の農山村を駆け回り、社寺や民家の被害状況を調べて歩いた。

当時は都市部の復興が優先され、しかも新しい日本の都市建設を標榜しながらも、現実には計画通りに行かず、縮小され、しかも外形的建築主義に陥り、佐藤先生の描く日本の美しい町造りから遠く現実に忸怩たるものを感じていた。そんなとき岡山や広島地方都市や農村に日本の奥ゆかしい社会が残っていることに勇気づけられた。荒廃したまま放置されていた長福寺の三重塔（重文、美作市）などは建築史的にも貴重なものであり、修理と管理を訴え続けたが、当時の日本は住む家と食べることを優先している時であり、国の予算はつかず、お金を出してくれたのはGHQであった。佐藤先生は都市部の理念なき復興に悩みつつも、農村に残る精神的豊かな社会を見つめて、新しい日本の都市の在り方を考えないわけにはいかなかった。後年、「都市の日本民俗建築学」が必要であると述べているが、この考えはこれらの経験が基底にあるのであろう。そして、このことについて『民俗建築』109号の巻頭言（1996.5）で、つぎのように述べている。

「(前半略)、そうしてもう一つ私は日本の場合に都市化はなんでも良いことと一般に思っていることが、環境の悪化、人心の一部の崩壊に原因しているのではなかろうかと思っている。これも外形的建築思潮を生じてしまい、内外のてんぷら家屋の流行は殊に明治以来盛んとなり、その安物は一層昭和期の後半に著しくなってしまった。それはただ外観を似せて家屋を考えることで足りるとする風潮にまでなることもあって、他にも原

因があって、止むないことではあったが、日本人のお人良しの一部に過ぎないのではないかなど思っている。なにか当座凌ぎで、家屋、殊に住居の動産化を知らず知らず育てて行ってしまったのかも知れない。そこで問題は、経済社会の都市と、農山漁の自然との共存地帯とを明瞭に区分して生活も住居も考えて、都市化なんでも結構で、どんどん都市的家屋で矛盾を生じつつある日本の環境を今こそ守らねばならぬことであると思っている。そうして一方では、都市の日本民俗建築学もなくてはならないのではないかと考えているが、これは今のところ全く無理なことであろうか。しかしこれこそ本当の都市の住宅政策であり、ただ機能のみからの都市住宅の現状の様々な試案時代に忘れられては、逆に田舎の滅亡を防ぐことはできないからと私は思っている。少なくとも田舎では土地建物は決して動産の商品に考えられることなく、子々孫々への大切な宝、玉の壺と考えて作り、守り、家庭生活の真の楽しさ、平常の安心平穩の一年一年の永続であってこそ、環境の保全美化も進められるであろうと思う。都市と田舎を混在せしめてはならないが、その相互の対立的協調に全てが動いてゆきたいものと私は祈っている。私の以上の夢が半世紀後に現状を改善しつつ出来てゆくことにでもなれば、滅びゆく民家ではなくて真の新しい民俗建築集落地に脱皮した日本の良さの一部となり、他の国の人々にも喜んで来てもらえることとなるであろう。もっと解りよく述べれば、田舎では土地や建築物は商品として一切考えないという思想に徹することであるといえよう。それには社会の多くの工夫が必要であることは言うまでもない」と、述べている。このときの巻頭言には日本の美しい農村とし

て富村の民家と集落の写真が2枚紹介されている。

昭和27年、佐藤先生は広島大学助教授のとき富村集落の実測調査をしたが、これについては『民俗建築』アーカイブ④、⑤「昭和27年の岡山県苫田郡富村―その一、その二」(『民俗建築』144号、145号)で紹介した。今回はその続きであるが、これは2016年7月26日、広島の笹田登代様宅(佐藤先生の三女宅)で新たに42枚の写真を見つけたもので、これは27年の民家調査の折、人々の生活を撮影したものであった。佐藤先生は建築担当であったから、民俗については調査していないと思っていたが、人々の生活の様子を機会を得て撮影していたのである。しかもその一か月後の5月4日には布施神社のお祭りがあると聞いて、それを撮影するために単身訪れている。今回はこのときの写真を紹介する。

なお、写真撮影のときは、佐藤先生は住民の了解を得ておられたと思うが、59年後の今日、これらの写真を学会誌に掲載することの了解を得ることは不可能である。個人情報の問題はあるが、当時の人々の生活を紹介する学術的目的であり、また、懐かしい映像としてご理解いただければ幸いである。

謝辞 本稿に掲載した写真は旧富村の方々のご協力とご理解によるものである。ここに記し謝意を表します。また、鏡野町教育委員会日下隆春氏には前回に引き続いてご協力を戴いた。厚くお礼申し上げます。

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料
をご希望の方は下記へ申し込んで下
さい。無料で提供します。
日本民俗建築学会資料担当
古川修文
syu-bun@jcom.home.ne.jp